狢

田中貢太郎

幕末の話である。

某商人（あるあきんど）が深更（よふけ）に赤坂（あかさか）の紀（き）の国（くに）坂を通りかかった。左は紀州邸（きしゅうてい）の築地（ついじ）塀、右は濠（ほり）。そして、濠の向うは彦根（ひこね）藩邸の森々（しんしん）たる木立で、深更と言い自分の影法師が怖（こわ）くなるくらいな物淋しさであった。ふと濠傍（ほりばた）の柳の木の下にうずくまっている人影に気づいた。

どうやら若い女のようで、悄然（しょうぜん）と袂（たもと）に顔をうずめて泣いているのであった。商人はてっきり身投げ女だと思った。驚かさないようにして女の傍（そば）へ寄って往（い）った。

「どうかしたのかい、姉さん。狭い量見を起しちゃい

けないよ」
女は顔もあげないでしくしくと泣きつづけた。商人は寄り添って腰をかがめた。
「ね、どうしたんだい。姉さん思案にあまることがあるなら、いくらでも力になってやるよ、わけを言って見な」
女はますます袂へ顔をうずめて泣き入るばかりであった。商人はじれったくなって女の肩へ手をかけた。
「どうしたのだ、姉さん、人が親切に言ってるのだ、わけを言ったらいいじゃないか」
女はひょいと袂から顔をあげた。それは目も鼻も何

もないのっぺら坊であった。

「わ」

商人は一声叫ぶなり坂を四谷（よつや）の方へ逃げあがった。あがったところに夜鷹蕎麦（よたかそば）の灯があった。商人は鞴（ふいご）のような呼吸（いき）と同時にその屋台へ飛びこんだ。

「大変だ、大変だ」

「どうなすったかね」

もやもやと立つ湯気の向うにいる親爺（おやじ）はつまらなさそうに言った。

「どうもこうもありゃしねえ、そこで大変な代物に衝（ぶ）っ突（つ）かったんだい」

「追剥(おいはぎ)にでもお会いなすったかね、当世珍らしくもねえ話だ」
「馬鹿にするな、追剥ぐらいで江戸っ児が騒ぐかい。妖怪(ばけもの)に会ったんだい、大変な顔をしてやがったのだ」
「へ、大変な顔、どんな大変な顔でござんした」
「それがおめえ、恐ろしいの何のって、とても一口にゃ言えやしない」
「こんな顔じゃなかったかね」
親爺はぴしゃりと額(ひたい)を一つ打つなり湯気の間から顔を出した。目も鼻も何もないのっぺら坊だった。
商人は気を失った。その頃紀の国坂一帯には狢が

数多棲んでいて、よく悪戯をしたと言われている。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集３　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　　１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　　１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年8月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。